

全体討議

「現代における古典学の役割」(抄)

「一般古典学」と「個別古典学」

中川 久定 (司会)
京都国立博物館 館長

それでは、ただいまから最後の全体討議を始めさせていただきます。6時にはすべてを終わらねばなりませんので、あと40分しか残っておりません。この2日間を通じて提起された問題は、余りにも多岐にわたっておりますので、討議の主題が拡散し過ぎることを心配しています。そこで僭越ではありますが、司会者としてあらかじめ3つの問題を提出させていただきたいと思います。

昨日、この公開シンポジウムの冒頭、「古典学再構築」の中谷領域代表から「一般古典学の構築にむけて」というお話しがございました。その中で中谷代表は、諸文明圏それぞれを単独に対象とする「個別古典学」を超えて、「一般古典学」を構築すべき必要性を力説されました。この趣旨に関しては、おそらくどなたからも異存はなкаろうと推察いたします。ただ、その際には、まず次の3つの問題を解決しておかなければならないのではないのでしょうか。最初の問題は、「個別古典学」にかかわり、あとの2つは「一般古典学」に関係します。

まず、「個別古典学」に関しては、なにをもって古典と呼ぶかが、改めて問い直されねばならないでありましょう。古典に対して、通常漠として思い浮かべられている観念は、時代と場所を超えていつも人々の心に訴えかける、なにか普遍的で変わらない価値を内包するテキスト、といったものでありましょう。

このような通念に対して、強く異議を唱えているのが、カルチュラル・スタディーズであります。社会にある諸集団それぞれの利害の葛藤の場として文化をとらえ直そうとするのが、カルチュラル・スタディーズ

の立場なのでありますが、この立場に立つコロンビア大学のグループは、従来の「古典」ということばに代えて、「キャンノン(正典)」という用語を提唱します。キャンノンは、相互に闘いあう文化的諸勢力のうち、主導権を握ったものによって決定されてゆく、とする。このような文化的闘争はあらゆる時代に存在しているはずですから、したがってあらゆる時代はその時代ごとに、文化的主導勢力が決定したキャンノンをもつ。

17世紀から19世紀にかけて、ラテン語とギリシャ語の教育を中心としていた西洋の中・高等学校において、クラス用の教材として選ばれた著作をクラシックスと呼び、日本ではこれを「古典」と訳し、以後これが慣用となって今日まできているのですが、優れた著作をギリシャ・ラテンのものだけにいつまでも限定しておくことに無理があることは明らかでしょう。その後でも、立派な作品が続々と生み出されてきているのですから。その点からいえば、たとえ闘争の結果としてであれ、あらゆる時代が時代ごとに新しいキャンノンを作り出していると考えられるカルチュラル・スタディーズの立場は、伝統的古典の枠を広げるものとして、大きな意味をもちうるでしょう。

しかし、キャンノンは、ただ単に主導権を握った社会的グループによって決定されたに過ぎないということ、すませられるものでしょうか。キリスト教のキャンノン、正典である新約聖書を例として考えてみましょう。イエスの没後、約300年かかって総計27の文書がキャンノン、正典として確立されました。ところが、この中には、最初から読み手をはっきりと限定した書簡類も含まれています。例えば、パウロによるローマの信徒への手紙のように。このような受け取り手の限定がついているにもかかわらず、この種の書簡が普遍的な呼びかけを特色とすべき正典のうちに編入されているのはなぜなのでしょう。パウロ派が、初期教会内部の闘争で勝利をえたから、という理由だけでは説明にならないでしょう。空間的・時間的限定、あるいは制約を超えて、あらゆる時代のすべての信徒に対して、あるいはさらにそれを越えた人々に対しても訴えかけ

うる、ある普遍的な力を内在させていなければ、キャンノンになりえなかつたはずだからです。したがって、この普遍的な力、あるいは価値の内実を明らかにしないことには、この手紙のキャンノンとしての特質を明らかにしたことはないでしょう。

問題をはっきりさせるために、たまたま新訳聖書に例をとりましたが、問題は宗教的文書だけにかかわることではありません。「一般古典学」の構築のためには、まずあらゆる時代と場所において、それぞれのキャンノンにキャンノンとしての適格性を与えているテキストの内的特質を明らかにする必要があるように思われます。

あと2つの問題は、「個別古典学」を超え、文明圏ごとに異なる、多様な特徴をもった複数の古典群を対象とする「一般古典学」にかかわっています。まず第2の問題、文明の多様性に由来する問題点から見ていきたいのですが、一見当面の主題とはかかわりないような一つの事件を例にとることをお許し下さい。

人類のきたるべき長期的宇宙旅行を準備するために、現在先進諸国は宇宙ステーションの飛行実験に協力しています。ステーションが完全な形で活動し始めるのは2004年からです。完全な稼働が始まるのにそなえて、宇宙ステーションと同じ閉鎖条件をもつ空間をロシアで地上につくり、その中に数名の選ばれた人間を入れて、長期的閉鎖空間内での生活が人間に及ぼす影響を、現在実験的に調査中です。そこで昨年末に次のような事件がおこりました。すでに数か月を閉鎖空間内で暮らしてきた乗員は、年越しを祝うために、一室に集まり、シャンパンで乾杯し、そのあと酒を飲み始めました。そのうちにロシア人の間で喧嘩が始まりました。殴り合いになって、双方が鼻血を出すというありさまでしたが、これはなんとなく片がつきました。そのあとしばらくしてロシア人の男性1人が、カナダ人の女性にキスをしたい、といいました。女性は、むっとして断ります。男はなおも迫ります。女は激しく怒り、ののしり、男もまた、なにをこんなことで険々するのか、とののしり返す。しかし、一旦は険悪な空気の高まったこの件も、またなんとか収まりました。

しかしこの時を境にして、閉鎖空間内の人間関係に亀裂が入ったようになってしまいました。実験に参加していた日本人の青年は、悪化したこの雰囲気になんて耐えられなくなって、意欲を失い、途中でこの実験を降り、閉鎖空間の外に出てしまいます。

事件後の反応も、当然3つに分かれました。ロシア人にとって、年越しに男女がキスをするのはごく当たり前の習慣で、いやなら断ればいい。腹が立ったのな

ら相手の顔を殴ればすむことなのに、なぜあれほどの大騒ぎをするのか理解できない、というのです。また、酒を飲めば喧嘩と殴り合いはつきもので、それを問題にすること自体がおかしい、ともいう。一方カナダ人の女性は、女性の人格を無視したあの振る舞いは許せない、と主張し、非ロシア人グループは、すべて彼女の味方をしました。ただ日本人の青年だけは、閉鎖空間内部での暴力事件と、それに続く人間間の分裂、重苦しい雰囲気がもはや耐えられない、こんなところではとても生活できない、というのです。

これは、現実起こった事件ですが、これだけ考え、感じ方の異なる3つのグループの間で、どこに共通の基盤を見いだしてコミュニケーションをはかればいいのか。日本の宇宙開発公団は、作業部会を編成し、会合を重ねながら、現在この問題を検討しつつあります。

2つの、あるいは複数の異質文明圏に属する古典と古典との間で対話をはかろうとする時、おそらくこれと同種の問題が、もちろん異なる次元においてはありますが、必ず持ち上がってくるのでありましょう。その際、共通のコミュニケーションの地盤をどこに見いだせばいいのか。諸古典間の共約可能性を、どこに見いだせばいいのか。「一般古典学」を建設するためには、この第2の問題にも答える必要があるでありましょう。

第3の問題は、次のようなものであります。先の第2の問題と直接関係することではありますが、諸文明圏のうちには、超自然的啓示、あるいは天啓に基づく宗教的聖典を古典としてもっているところがあります。ヒンドゥー教、ゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの聖典です。もしこれらのそれぞれが自らの絶対性を主張し始めた場合、どのようにすればこれら相互間のコミュニケーションがはかれるのか、という問題です。ヨ・ロッパの18世紀に起こったある論争を例としてあげさせていただきます。創世記冒頭の一節「初めに、神は天地を創造された(パーラー)」の解釈をめぐる展開されたカトリック神学者と非カトリック系(プロテスタントの、あるいは理神論の立場に立つ)学者との間の論争です。ヘブライ語動詞の完了形「パーラー」を、「創造された」と解釈する前者に対して、後者は、「パーラー」が「つくった」という意味しかもっていない、ということを強調します。もし前者のように理解すれば、神による無からの創造という教義になり、後者のように解釈すれば、素材となる物質が、神のこの行為に先立って存在していて、神はただ先在的物質に加工して、形を与えたに

すぎないという教説になります。

ここでの問題は、あくまで言語的次元で解決されるべきことに属しています。しかしカトリック教会の神学者はここで、自分たちの主張は「原初的啓示と、アブラハムからモーセにいたる族長およびその子孫の伝承」に基づくものであるから、正当で絶対的根拠をもつ、と論争に決着をつけたのです。もし諸宗教の聖典が、それぞれの「原初的啓示」をもち出してきた場合、一体どういうことになるのでしょうか。どのようにして諸宗教間の調停をはかり、コミュニケーションを可能にすればいいのでしょうか。「一般古典学」を成立させるためには、この問題をも前もって、解決しておかなければならないように私には思われます。

司会者としては、少し長くしゃべりすぎてしまいました。今の3つの問題にかかわらせて、なにかご意見をうけたまわることができれば、と思います。もちろん、私があげました問題とまったくかわりのないことでも結構です。ご発言はございませんでしょうか。

(B03「近代社会と古典」班)

